

乳児保育における環境構成について

鈴木 方子

Formation of Environment in a Nursery School

Masako SUZUKI

1 研究の目的

現代の日本社会においては、少子高齢化に加えて働く母親の増加、経済不況の影響もあり、保育所への入所を希望するが入れない待機児童が増加している。厚生労働省によれば、2009年10月の待機児童数は46,058人で、同年4月に比べても1.8倍の増加となっている。そのうち0歳から2歳の低年齢児が全体の81.9%を占めている。¹⁾ このように3歳未満児の保育の需要は高まっていることが読み取れる。政府は2008年から新待機児童ゼロ作戦を展開し、2010年1月には子ども・子育てビジョンを閣議決定した。新待機児童ゼロ作戦には「待機児童解消を目指し、民間保育所における受け入れ児童数の増を図るとともに、第3子目以降の保育料を無料とする」²⁾との記述がある。また子ども・子育てビジョンでは、「待機児童の解消のために、保育所の整備に加えて、小中学校の余裕教室や幼稚園等の既存の社会資源の活用、賃貸物件を活用した保育所分園の整備、家庭的保育の拡充などを推進し、計画的に公的保育サービスの受入児童数の拡大を図る」³⁾とのビジョンが描かれている。

これらの計画は現在進行中であるが、このような政府の受け入れ児童数を増やそうとする対策に対して考えなければならないのが、保育所での保育の内容である。保育所は、「子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場」と保育所保育指針に明記してある。当然受け入れ児童が増えれば、その内容も変更せざるを得ないであろう。また、1歳2歳の低年齢児が、保育所の開所から閉所までの時間を保育所で過ごしているという例を聞くと、長時間で人数の増えた状況の中で、どのような保育を行うのかが、保育者にとって直面する課題であるといえよう。

それでは、現代社会において、特に3歳未満児に望ましい保育内容とはどのようなものであろうか。保育内容とは保育所で展開される幼児の生活の全てであり、その検討のためには、何か手掛かりが必要である。実際に保育に参加する以外に保育内容を振り返る視点としては、保育記録が挙げられる。今回は、保育の記録、その中でも環境構成の視点から保育内容を検討してみたいと考える。

なお、標題の乳児保育における環境構成の乳児保育とは、保育所保育指針で乳児保育と表現されている満1歳に満たない者の保育と3歳未満児の保育を含めた保育を表すこととする。

2 保育の記録と環境構成

(1) 保育の記録

筆者が勤務するA大学は、保育士養成施設として、保育所実習が義務付けられている。保育所実習に際して、実習生は、毎日の実習終了後に実習を振り返って記録を記入する。様式は表1に示しているが、上段のねらいは、子どもの保育のねらいであり、保育所の指導計画から導き出されるものであり、実習の目標は、実習生がその日の実習で目標とすることを記入する。記録を記入する欄は、時系列に沿って、環境構成・子どもの活動・保育者の援助（実習生の活動）の3つに区分されている。

表1 保育所実習における毎日の記録用紙の項目

月 日 () 天候		組 (歳児)	出席数 名
主な活動		ねらい	
		実習の目標	
時間	環境構成	子どもの活動	保育者の援助 (実習生の活動)

*実際はこの用紙がA4サイズ1枚となり、裏面に反省・考察を記入する。

この記録を書く際に、学生から環境構成に何を書いたらいいのかという質問を受けることがよくある。そこでまず保育の記録のもつ意味についてまとめてみる。

保育記録とは「保育者が保育の中でできごとを振り返り、子どもの行動やそれに対する自分のかかわりについて、その時の子どもの気持ちや行動の意味、自分自身の感じとり方や指導・援助の意図まで考えながら記録したもの」⁴⁾である。この記録を通じて、子ども理解を深め、保育を振り返ることにより、指導、援助の方向性を見出していく。そしてそれが指導計画の立案につながっていくのである。高内⁵⁾は記録を取ることによって、何気なくやったことが意識化され、保育を客観化することにつながって、実践上の問題点を見つけたり、子どもをみる目が深まり、明日への保育の見通しをつくり出していけるとしている。しかし、河邊は、「ほとんどの保育者がどのように記録すればよいか悩んでいる。1つには、保育における記録をとる行為の意味を保育者自身が明確にもっていないこと、2つには、そのために保育に生きる記録の視点を明確にもてないでいるためではないだろうか。」⁶⁾と述べている。記録をただ時系

列に沿って書くのであれば、いくらでも書くことがあるであろう。その中で保育者は取捨選択して記録をとっている。思い出して記録するということは、保育者が何らかの意味を感じているからであり、それが河邊が言うところの記録をとる視点であり、それを明確化するための枠組みとして、A大学では表1に示したように環境構成、子どもの活動、保育者の援助の項目を設けている。

次項では、環境構成をどう捉えたらいいのかについてまとめてみる。

(2) 環境構成とは

①保育所保育指針における環境構成の捉え方

保育所保育指針においては、保育所は、その目的を達成するために、「保育に関する専門性を有する職員が、家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている」と明記されている。また保育士等が保育のねらいや内容を具体的に把握するための視点としての領域環境でも、子どもが身近な環境に自ら関わっていくことがねらいに記されている。

そして子どもの発達は、子どもがそれまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得していく過程であると位置づけている。このように、保育所保育指針においては、環境という概念は大変重要な意味を持っている。

次に環境構成であるが、これに関しては、保育の目標に「子どもが自発的、意欲的に関わられるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること」と、子どもが主体的に活動するための環境構成をすることが挙げられている。さらに具体的な環境構成としては、保育士等や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、更には自然や社会の事象などに分け、こうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう、計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならないとしている。そこでも大切なのは、子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるよう配慮することであり、子どもが人と関わる力を育てていくため、子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えることが必要とされている。

②環境構成とは

環境構成を行うとは、事前の計画をするということである。環境構成の記録について考える前に、環境構成の計画の意味するものについてまとめてみたい。

「幼児は日々成長し変化していくものである。また、幼児を取り巻く環境も事前事象や社会事象等でも毎日変化しており、園環境は保育者の計画性や教育的意図によって日々構成され、その後も幼児の活動の展開につれて幼児と共に環境構成を柔軟につくり替えられるものでもある。」⁷⁾と、近藤が述べているように、園の環境は、幼児と共に柔軟に構成されるものである。高杉はそれを「保育ではねらいや内容を環境に入れ込み、子どもがその環境にかかわり、遊びを展開していくなかで、発達に必要な経験を得ていく」⁸⁾と遊びの展開を軸にした視点で捉えている。

河邊は環境構成について「保育という営みは、生活の主体者である子どもと保育者とが共に織りなすものである。望ましいと思われる生活を保育者が勝手に構想し、環境を整えたとしたら、それは子どもにふさわしい生活とはならないだろう。」⁹⁾と、保育者だけの計画では子

もにとってふさわしい環境構成とは言えないと述べている。そこで保育者の役割が重要となってくる。計画的な環境の構成とは、保育者の意図と子どもの主体性を組み込んでいくことであり、そのために基本となることは、子どもを理解しているかどうかである。赤崎¹⁰⁾は、子ども理解の上に立って次の3点を押さえることが必要と述べている。

1. 一人一人の子どものさまざまな姿を思い描く
2. その子どもにとって必要なこと、していることの意味を問い続ける
3. 人的環境としての保育者の役割をふまえる

すなわち、環境構成を考える上でも重要なのは、人的環境としての保育者の役割である。環境構成は、保育者が子どもを理解した上で、子どもと共に創り上げていくものであり、さらに月案、週案等の指導計画を保育者が計画していくのである。そこに保育者の意図が含まれるのは当然のことであり、人的環境としての保育者の重要性が理解できよう。

それでは、環境構成を日々の記録に書くことはどのような意味があるのだろうか。環境構成の欄について遠藤は「なぜ環境構成の欄が子どもの活動の欄の前にあるのかといえば、これこそが幼児教育の特質といえるものであるからである」¹¹⁾と述べている。

すなわち、子どもが自ら環境に関わることが保育の中で重要であり、保育者は計画的に環境を構成し、保育をするという保育所保育指針の方針に基づいて考えれば当然である。そしていすや机の配置だけを取り上げても、それぞれの場面に応じて保育者は異なる環境を構成している。その環境構成を記録することで、どのような遊びが展開され、どのような生活が営まれていたのか、遊びや環境と生活との関わりが見える記録¹²⁾となるのである。

日々の記録については、計画的に環境構成を行った結果を記録することになる。したがってその記録を書くということは、その日の保育のねらいが達成できたかを振り返る機会でもある。もちろん計画通りにはいかずに臨機応変に対応することもあるであろう。そうであれば尚更記録を書くことが重要な意味を持つてくる。そして日々の記録を振り返ることにより、臨機応変に環境を作り変えていくことの必要性が理解できるであろう。すなわち、環境の再構成が行われ、その繰り返しが保育内容として積み上げられていくのである。

計画、実践、記録、省察という流れの中に環境構成もあるのである。この環境構成に何を書いたらいいのかという学生には、適切な環境構成が行われていなかったと言うのではなく、ねらいが明確になっていないことにより、環境構成を見る視点が浮かび上がってこなかったのではないだろうかと伝えていく必要があるであろう。

③保育所の環境

環境といってもその範囲は広いが、保育所の環境を捉える視点として、全国社会福祉協議会は、保育所保育指針が示している保育を実現するための保育所の環境について整理し、子どもと保護者等へ保育所の機能を提供するために必要な空間・環境の指標をガイドライン¹³⁾としてまとめた。(表2)

このガイドラインは、自治体、建築士をはじめ、保育所の事業者、保育士等現場職員を対象としている。その中で保育士等現場職員に対しては、「保育所が提供する機能を理解し、保育の実施にあたってさまざまな空間の設定を行う際の設定方法について知識を得、生かすための指標」¹⁴⁾となるように構成されている。このガイドラインは、あくまで保育所の機能を建物を中心とした物的環境の面からまとめたものである。しかしその中に保護者支援、地域での子育て支援等の現在保育所に求められる機能を含めている点が重要であり、環境構成を考える上

表2 <機能別にみる環境・空間の設え ガイドライン（構成）>

<u>I 登園・降園のための機能</u>	<u>III 保護者支援のための機能</u>
1 登園・降園	8 保護者支援
<u>II 子どもの生活・あそびのための機能</u>	<u>IV 地域の中で果たすべき機能</u>
「生活行為」	9 地域における子育て支援
2 食事	10 社会的役割としての保育所
3 睡眠・休息	<u>V 保育所運営のための機能</u>
4 排泄	11 保育所運営のための空間
「あそび」	<u>VI 共通事項</u>
5 屋内あそび	12 安全・衛生
6 屋外あそび	13 光・空気・音環境
「障害のある子どもための環境」	
7 障害のある子どもための環境	

で示唆を得ることができる。

次項では、このガイドラインを参考にして、実習生が気付いた環境構成を分類することにより、環境構成の何に注目しているかを知るとともに、環境構成から見た保育の内容、記録の書き方を考察することとする。

3 研究の方法

乳児保育における環境構成を考える資料とするために、A大学児童教育学科の学生に、保育所実習終了後にアンケートを実施した。なお学生にとって今回の実習は初めての実習であり、実習の形態としては、観察実習、参加実習が中心である。

アンケート実施の概要

日時 平成22年7月6日

対象 A大学児童教育学科 幼児保育学専攻 2年生 94名

平成22年6月7日から18日までの保育所実習を終えた学生

内容 「乳児保育の環境構成を考える上で、実習園で工夫していたこと」について自由に記述する。なお、乳児保育を経験しなかった学生については、乳児保育の環境を、自分が見た範囲で記入するように指導した。

4 結果と考察

(1) アンケートの結果

アンケート内容を表2のガイドラインに沿って分類したものが表3である。なお回答は複数

回答のため、実数は数字で示してある。

表3 機能別にみる環境・空間の設え ガイドライン(構成)による分類

分類項目	回 答	実数
1. 登園・降園	ロッカー、タオルかけ、いす、机にマーク、写真を貼ってわかりやすくする 保育士の写真が貼ってある	26 2
2. 食事	スプーンやフォークの形が年齢によって違う	1
3. 睡眠・休息	お昼寝の場所の工夫	4
4. 排泄	手洗いの床に動物の絵を貼る トイレの壁にキャラクター等の壁面装飾をする 保育室におまるが置いてある トイレの床はすべらない素材、フローリング 園庭からつながったトイレ 保育室とトイレがつながっている トイレの前にすだれがしてある トイレを清潔にしている 名前を書く	3 7 2 2 2 1 1 2 1
5. 屋内あそび	片付けの場所に玩具の写真が貼ってある 子どもの作品展示コーナーがある 玩具が低い位置にある 玩具が大人が届く位置にある 絵本の種類わけを色シールで行っている コーナーにカーペット、マット、たたみ等を敷いたり、柵を使用して遊ぶ場所、玩具を区分している 遊具も時間帯によって使っていいものといけなものを分ける リサイクルおもちゃ、靴下入れ、タオル入れ、帽子入れが牛乳パックで作られている 季節感をあらかず壁面飾り 保育室に植物が飾ってある 保育室の模様替えをする 保育士の立ち位置に気をつける 次の日の保育の設定で、子ども達が興味を持ち遊んでいたものを思い出し、机の上に置く	35 2 6 1 1 8 1 2 4 1 1 1 1
6. 屋外あそび	園庭に区切りがある、乳児用の砂場がある 園庭を使う時間帯をずらす 乳児クラスに小さなテラスがついている 散歩に行くのかご型ベーカーがある 外遊びの際に寝転んだりできるようにござが用意してある 使っていい遊具といけな遊具がある 保育室からすぐ園庭に出ることができる 乳児専用のプールがある	18 16 6 4 2 1 1 1

乳児保育における環境構成について

	散歩で自然とふれる 野菜を育てている 虫を飼う、ダンゴ虫さがしをする 花壇の水遣りを行う	6 27 19 11
7. 障害のある子どものための環境		0
8. 保護者支援	保護者会、保育参観	6
9. 地域における子育て支援	小学生、障害児が遊びにくる	2
10. 社会的役割としての保育所	地域の人との交流	11
11. 保育所運営のための空間		0
12. 安全・衛生	子どもが裸足なので保育者も裸足、上履きははかない 扉に簡易式の鍵、ストッパーがある 机の角にはテープ等を貼り、危なくないようにする たんすの取っ手がひもに変えられている 玩具の消毒 洗濯機が手洗い場に置いてある 遊具下にマットを敷いてある 水道栓を外している ブランコいすを取り外している 砂場にシートをかける 水撒き、水たまりの水を吸い取る 蚊にさされない工夫をしている 砂場の砂おこしをする	6 16 5 1 1 1 4 3 3 2 2 1 3
13. 光・空気・音環境	日よけを使用している	7

(2) 考察

このアンケートは学生が実習に行った保育所で気がついたことを自由に記述した結果をまとめたものである。たとえばロッカーや机に子どもの写真が貼ってあるという記述が26件見られたが、それ以外の保育所ではなかったということではない。学生がその環境構成を当たり前のこととして気がつかなければ記述はしないわけである。よって、このまとめからは、環境構成の工夫について学生が何に注目しているのかという傾向を知ることができる。

一番多かったのは、ロッカー、タオルかけ、いす、机にマーク、写真を貼ってわかりやすくするという点と、片付けの場所に玩具の写真が貼ってあり、子どもが片付けしやすい工夫がされているという点である。机やいすにシールや写真を貼るということは、自分の場所がわかるということと、他の子どもと区別するという意味があることを示した例である。さらに保育者が、帽子をかぶっていない子ども、着替えが済んでいない子どもが誰かわかりやすいとの意

見があった。また片付けでは、「ブロックをしまう箱に写真がはってあった。色も分けてしまうようにしていたので広がっているブロックの中から楽しみながら片付けができるのではないか」などと、片付けを子どもが自ら環境に働きかける行為として捉えている記述が見られた。時計に赤や緑のシールが貼ってあり、赤のところ長い針がきたら片付けの時間だよという言葉掛けによって、子どもが場面の切り替えをしていく例も挙げられた。またブロックやパズルなどがまだ完成していない時や、次の遊びの時間にまたやりたいと思った子のために保管して置ける場所、作品展示コーナーがあることに気がついた学生もおり、環境の工夫が保育の継続を可能にしていることが伺える。遊びに関しての工夫は、「1歳児の部屋は柵で室内が区切られ大きな滑り台やトランポリン、おままごとやパズルと分かれていた」というように可動式の柵を使ってあそびのコーナーを分けたり、食事や昼寝の場所を区分したりする例が見られた。

排泄に関しては、常にトイレを清潔にしておき、子どもが行きやすくするというねらいに対して、さまざまな環境構成の工夫が見られた。アンパンマン等のキャラクターを利用したり、子どもの目線のところに絵や写真を貼る等の工夫である。手洗いに関しては「洗面台の前の床にうさぎ、ぱんだなどの動物の絵が貼ってあり、わたしうさぎさんがいい、と言って、きちんとうさぎの列に並んで待つことができていた」などの例が挙げられた。

屋内あそびでは、玩具は、子どもの手が届く位置にあるという記述と、「子どもが勝手におもちゃで遊んでけがをしないようにおもちゃは大人が届く位置にある」との両方の環境構成が見られた。前者は子どもが好きなおもちゃで遊ぶことに配慮したものであり、後者は安全に配慮した働きかけである。屋外での乳児と幼児の遊ぶ場所については、場所を区切っている例と時間帯によって区分している例が挙げられていた。安全面からの配慮として両者を組み合わせて構成している園がほとんどであろうと思われる。また、自然環境に関する記述も多く見られた。5歳児が野菜を作っていて、2歳児はそれを見て興味をもてるようにするなどの食育をねらいとした野菜づくり、生き物の飼育を通じての自然とのふれあいも多くの園で実施していた。「動植物が園庭にあふれていた」「金魚が死んだらお墓をつくっていた」「つばめが園内に巣をつくっていたので観察できるようにしていた」等自然と直接触れる経験を重視していることが伺える。

保護者支援では、「父母と子ども達とラディッシュの種を植えていた」「保護者が一日保育に参加していた。べったりだったけど、それもいいんだと思った」など、保護者が保育園の行事に積極的に参加する機会が設けられている。保護者との連携を図る上で保育所での子どもの生活を理解してもらうことが重要な点であると思われる。子どもとの共同作業を通じて会話が増え、お互いを理解するきっかけとなるのではないだろうか。

地域における子育て支援は、未就園児が遊びに来たり、保護者が見学に来たりしている。「障害のある子どもが定期的に遊びに来ていた。その子は子ども達と楽しそうに遊んでいた。園の子どもにとってもよい刺激となると思う」という記述も見られた。また社会的役割としての保育所では、地域の人々との交流が主な活動である。地域の人に保育所に来てもらって遊びを伝授してもらったり、老人会の方々が遊びに来たり、また保育所から地域に出掛けて行って商店街の人に話を聞いたりといった活動が挙げられている。「登園してくる道の花壇に花や野菜が植えてあり、それは地域のおばあさんが協力してくれて植えてあるものだった」と環境整備に地域住民が協力している姿から、保育所の地域での役割を押し量ることができるであろう。

安全面では鍵の取り付け、手をはさまない引き戸の工夫など、保育所ならではの工夫がなされている。障害のある子どものための環境、保育所運営のための空間の項目に関しては、乳児

保育に分類されるのではなく、保育所全体で機能しているのでここには挙げられていない。

(3) B保育所における環境の工夫

この項では、乳児保育を行っている保育所の環境構成を、筆者が観察し、ガイドラインに沿ってまとめた。

B保育所における環境構成の観察

日時 平成22年7月26日

概要 B保育所は3, 4, 5歳児の縦割りクラスが5、1歳児クラスが1、2歳児クラスが1の計7クラスで構成されており、そのうち1歳児クラスは園児10名に保育士2名が配属されている。保育室は幼児の保育室を乳児用に改築し、平成22年度より1歳児10人のクラスとして使用している。この1歳児クラスの環境構成について記録した。

1. 登園・降園

子どもと保護者が登園すると、子どもは保育士と一緒に遊び始める。その間に保護者は、着替えを決められた棚に入れ、お手ふきタオルを掛け、1回分の着替えを所定のかごに入れ、連絡簿に記入をする。保護者は準備をしながら、保育士と会話を交わし、子どもにあいさつをして別れる。玄関にサインペンのはいた箱が置いてあり、名前を書き忘れたものにかきまじょうと書いてある。すぐにその場で、という工夫は、保育者にとっても保護者にとっても取り組みやすい事例である。

2. 食事

食事コーナー横には給湯ができる配膳台があり、おやつや給食の配膳、調乳を行うことができる。食事・おやつコーナーはフローリングの床で、遊び、午睡コーナーはじゅうたんが敷かれている。子どもの定員は10人であるが、机は6人掛けの机が1つである。おやつ、給食は5人ずつのグループで順番に済ませる。二人の担任でゆるやかな担当制を採っており、そのグループで行動しているが、メンバーは固定ではない。子どもの生活リズムに合わせて早い時間帯に食事をしたい子、早くお昼寝をしたい子等をその日その日の体調を把握した上で編成している。少しの時間差をつけることによって、一斉に食事をするという形態ではなく、保育士一人に5人の子どものというグループで落ち着いて食事をする事ができていた。

3. 睡眠・休息

午睡は遊びコーナーと一緒に場所である。食事前にふとんを敷き、食後スムーズにお昼寝ができるように流れができています。

4. 排泄

手洗い用洗面台、幼児用洋式便器2つとシャワー、洗濯機が配置されている。着替えの衣類やおむつは引き出しではなく、扉のない棚に名前のついたかごを入れて収納している。保育士にとっては引き出しを開けるという手間を省くことができ大変機能的である。子どもにとっては4月当初は衣類を引っ張り出すこともあったが、繰り返し伝えたり、可動式の柵を柵の前に置いたりして工夫している。

5. 屋内あそび

遊びコーナーにはカーペットが敷いてある。皆が登園するまでの時間は段ボール箱を乗り物に見立てて出たり入ったりして遊んでいる。大小異なる大きさの箱を利用して一人が一個の箱を利用することができるようにしている。全員が登園した頃、一人ずつが遊ぶ車の玩具が用意

され、30cm×50cm位のタオルを保育士がカーペットの上に敷き始めた。子どもは一人一人その上で手に持った玩具で遊んでいる。もちろんそこから出て遊ぶ子もいれば、保育士の膝に乗って車を走らせている子もいる。自分の場所をわかりやすくすることで、子ども同士のいざこざが減ったとのことである。

6. 屋外あそび

1歳児クラスの園庭は、柵で区切られている。その中で車に乗ったり、砂遊び、水遊びをしたり、どんぐり拾いや落ち葉拾いをして遊ぶ環境が整っている。柵は幼児が乗り越えることができる高さなので、1歳児と遊びたい幼児が出入りすることもある。

7. 障害のある子どものための環境

幼児クラスには障害のある子どもが在籍しているので、子どもの姿勢に合わせた椅子、椅子に座ったときに床に足がつくようにした台、パニックを起こした子どもが落ち着くことができるための静かな環境の部屋が用意されている。

8. 保護者支援

保護者の相談を受ける場として職員室または以前1歳児の保育室として使用していた部屋が利用されている。また保護者会が利用できる部屋があり、そこは図書室になっており、図書の貸し出しも保護者会の仕事である。

9. 地域における子育て支援

未就園児の園庭開放が月1回行われているが、そのときは園庭と遊戯室を使用している。

10. 社会的役割としての保育所

B保育所は社会福祉法人立であり、理事長は保育者として働いていた時代から大勢の卒園児を送り出している。そのため、保護者が卒園児という例も多く、また成人した卒園児からの相談を受けることもある。今夏には10年前の卒園児が園庭に埋めたタイムカプセルを掘り出す行事が行われた。

11. 保育所運営のための空間

職員室では、職員会議の他、園児のベッドもあり、体調がよくない園児が保護者の迎えを待ったり、怪我の手当、給食の人数報告に当番が来たり、と園児の出入りがある。職員室のすぐ隣に事務室があり、ここでは園長と事務員が仕事をしている。

12. 安全・衛生

門扉の鍵閉め、子どもが触れてはいけない器具、入ってはいけない場所に貼付してある絵と記号で示したカード等の工夫がある。

13. 光・空気・音環境

園庭のすぐ南をJRが走っており、南を遮る建造物はなく、電車のガタンゴトンという音が定期的に響いている。その音はあたりまえのこととして捉えられていて走り去る電車を見ることも子どもにとっては楽しい環境となっている。園の創立から50数年たっているので園庭の樹木が木陰を作り、1歳児の遊ぶ園庭では日よけは必要としない。

保育所の環境を、主に物的環境から見直すことによって、あらためて多種多様な環境に気付くことができた。認可施設であるので、児童福祉施設最低基準に基づいた乳児室の面積等は当然基準を満たしており、ここに記載したものはあくまで一部分に過ぎない。しかしこれらの環境を構成するには、保育者のねらいがあり、それが保育内容を振り返る視点として大変重要であると考えられる。たとえば、おやつを5人位のグループで交代で食べる場面でも、一人一人に応じて、落ち着いた雰囲気の中で行うというねらいをもった保育であるといえよう。それら

の保育の内容を振り返り、評価していく段階において、このガイドラインを利用した振り返りは有用であるといえるのではないだろうか。

5 今後の課題

(1) 望ましい環境構成のために

本稿では、乳児保育における環境構成を考える上で、保育所実習を行った学生が環境構成の何に着目したのかを取り上げ、また乳児保育を行っている保育所での環境構成をガイドラインに沿って分類した。

学生は主に物的環境に着目し、保育を行う上で子どもが自ら環境へ関わっていくための保育者の工夫を知ることができていた。たとえば、おもちゃの片付け、自分の場所をマーク等で示す環境設定については、子どもが自分から行動しようと思うような環境設定として捉えている。また、子どもの安全確保に関する気付きは今後の実習等の体験の中でも生かされていくはずである。さらに少数ではあったが、保護者の参加、地域住民との交流等の社会資源についても記述があった。ありとあらゆる環境の中で、そこに関わっていくのは子どもであり、保育者である。その基準は子ども理解の上に置かれるものである。子ども理解が環境構成につながるという視点を改めて大事にしていきたい。今後は環境構成を行う前提となる保育のねらいとの関係について考察していくつもりである。さらに大切なことは環境を構成する保育者であり、人的環境の重要性についても今後の課題としたい。

(2) 記録の書き方

保育所実習で、学生が環境構成を記録するにあたって、何を書いたらいいかわからないという疑問に対しては、保育のねらいが明確になっていないまま、実習に参加していたのではないかと考えられる。子どもが自ら環境に関わっていく生活を送り、保育者として自分も参加して、その一日を振り返ったときに、環境構成の工夫が子どもの活動を引き出したと理解できれば、それが記録となっていくであろう。もちろん保育のねらいを知るとともに、子どもの発達を理解することが前提となる。すなわち、環境だけを取り上げるのではなく、子ども理解や指導計画を理解することも必要となってくる。保育内容を考えるにあたって、計画、実践、省察が繰り返されるように、記録を書くことも、それらの過程の一つとして、位置付けられよう。そのような視点に立って、保育実習指導において、記録の書き方を学生に指導する必要性を痛感している。さらに、保育の記録を書くことから、環境構成を振り返ることができるような指導のあり方が求められている。

引用文献

- 1) 保育所入所待機児童数調査 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課調べ (2009)
- 2) 平成21年度版 少子化白書 p51 内閣府 (2009)
- 3) 子ども・子育てビジョン
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/vision-zenbun.pdf>
- 4) 上垣内伸子・森上史朗・柏女霊峰編 保育用語辞典第6版 p132 ミネルヴァ書房 (2010)
- 5) 高内正子：新乳児保育への招待 p161 北大路書房 (2009)

- 6) 河邊貴子：遊びを中心とした保育 p53 萌文書林 (2005)
- 7) 近藤幸子：幼児教育における教育的で計画的な環境構成と保育記録 佐賀大学教育実践研究 No.19 p156 (2002)
- 8) 高杉展：保育における“真”とは 発達 Vol.29・No.113 p45 (2008)
- 9) 河邊貴子：遊びを中心とした保育 p52 萌文書林 (2005)
- 10) 赤崎節子：小笠原圭・植田明編 保育の計画と方法 p105同文書院 (2003)
- 11) 遠藤良江：相馬和子・中田カヨ子編 実習日誌の書き方 p27 萌文書林 (2004)
- 12) 寺田清美：相馬和子・中田カヨ子編 実習日誌の書き方 p96 萌文書林 (2004)
- 13) 全国社会福祉協議会：機能面に着目した保育所の環境・空間に係る研究事業研究結果の概要 保育学研究 47 (2) p209-216 (2009)
- 14) 前掲書 p210

参考文献

- 厚生労働省：保育所保育指針 フレーベル館 (2008)
- 今井和子：今井和子・天野珠路・大方美香編 保育課程に基づく指導計画
ミネルヴァ書房 (2010)
- 今井和子：記録の書き方評価のしかた ひとなる書房 (2010)
- 永野 泉：保育研究における環境論の比較 淑徳短期大学研究紀要 No.45 (2006)